

様式 F-7-1

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）実施状況報告書（研究実施状況報告書）（平成23年度）

1. 機関番号

3	2	6	0	4
---	---	---	---	---

 2. 研究機関名 大妻女子大学
3. 研究種目名 若手研究(B) 4. 補助事業期間 平成23年度～平成25年度
5. 課題番号

2	3	7	3	0	5	4	2
---	---	---	---	---	---	---	---
6. 研究課題 利用者の・支援者による・当事者のための「福祉ライフログシステム」の実証研究

7. 研究代表者

研究者番号	研究代表者名	所属部局名	職名
0 0 3 8 3 5 2 1	シバタ クニオミ 柴田 邦臣	社会情報学部	准教授

8. 研究分担者

研究者番号	研究分担者名	所属研究機関名・部局名	職名

9. 研究実績の概要

日本の福祉現場は「書類にはじまり書類に終わる」とまで言われ、その硬直化が指摘されてきた。本研究は、介護記録・療養記録などといった、“支援者のための記録”を、高齢者や障害者が自らの生活向上と、主体性の源泉としうるような「ライフログ」へと転換していく情報システムの構想と試験的実証を目標としている。

今年度は日本の福祉的な状況の精確な把握、および求められるシステムの調査と試作に重きを置いた。特に今年、対象としたのは、日本の福祉の根幹である高齢者福祉である。ただし、日本の福祉社会の現代性、さらには社会構造そのものは、2011年3月11日に大きく変容したといわざるをえない。東日本大震災の特徴は、その被災地が高齢化・過疎化しており、被災者の大半は高齢者、まさに福祉支援の対象という点である。特に本研究は、そもそも仙台市や山元町など宮城県を対象としており、その多くが被災したため、その進展の中で、「福祉介護情報システム構想」の範囲内として、高齢者の被災した後の生活を踏まえたシステム立案と試用をおこなった。

具体的には、高齢者の生活の記憶を想起する情報システムの開発と運用を試みた。まず、介護施設の記録を読み込み、その情報をお年寄りにも楽しめるかたちで出力するシステムづくりをおこなった(柴田・服部・松本 2011)。次に介護生活における生活情報・「思い出」活用システムの試用と、高齢者向け実態把握の一環として、宮城県の協力NPOと山元町の依頼を受け被災した方々が「思い出」を探しだし共有するシステムとして活用した(柴田 2012a, 2012b, 柴田・保良・服部 2012)。以上により、高齢者などの介護生活における「思い出」の重要性を確認し、社会的背景として確認するとともに、そのためのライフログ蓄積システムの可能性を指摘することができた(Shibata 2012)。